

## 明治大学国際シンポジウム

『低炭素時代のサステイナブル・コンパクトシティへ向けて』

### 実施報告書

開催日時：2012年7月27日（金）18：30～21：00

場所：明治大学駿河台キャンパスリバティーホール

明治大学理工学部建築学科

■概要：

【国際シンポジウム】

『低炭素時代のサステイナブル・コンパクトシティーへ向けて』

2011年3月11日の東日本大震災は、都心部の交通機能をマヒさせるほどの混乱を招き、改めて人のつながりや安全・防災の観点を強く意識させた。例えば、東京都心部に近接し、88万人の人口を抱える世田谷区は、駅周辺を賑わい拠点とし、それらを交通ネットワークで結ぶ形で商業地が存在し、その周辺部には緑多き住宅地が広がっている。しかし、高齢化社会や防災に充分対応できていない交通やオープンスペースのネットワーク、遺産相続による貴重な文化・自然資源の減少、新規開発と周辺地域との調和などの課題等も存在しており、現在、世田谷区は20年ぶりに基本構想を改訂する作業を行っている。また、東日本大震災や東京都が公表した新たな被害想定を踏まえて地域防災の見直しや、農地の減少に歯止めをかけるため、点在する農地を群として都市計画決定するなど新たな取り組みも展開されている。

本シンポジウムでは、世界的な都市づくりの潮流であるグリーンコンパクトシティーの動きを参照し、大震災以降の日本の防災・エネルギー政策などのあり方について、国内外の学識者や世田谷区長が自由に議論をする。

■日時：2012年7月27日（金）18：30～21：00

■会場：明治大学駿河台キャンパス・アカデミーコモン3Fアカデミーホール  
（千代田区神田駿河台1-1）

■主催：明治大学理工学部建築学科

■共催：日本建築学会まちづくり支援建築会議・同都市計画委員会

■パネリスト：ピーター・ポッセルマン（米国・カリフォルニア大学バークレー校・教授）  
アン・シュウ（フランス国立建築大学ブルターニュ校・准教授）  
出口敦（東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授）  
倉田直道（工学院大学建築学部まちづくり学科・教授）  
佐々木宏幸（明治大学理工学部建築学科・准教授）  
保坂展人（世田谷区長）

コーディネーター：

小林正美（明治大学理工学部建築学科・教授）

藍谷鋼一郎（九州大学大学院・特任准教授）

■参加者：約70名（内訳：都市計画の専門家、一般市民、国際ワークショップ参加学生など）

■進行：

## プログラム

### 0. 建築学科長挨拶

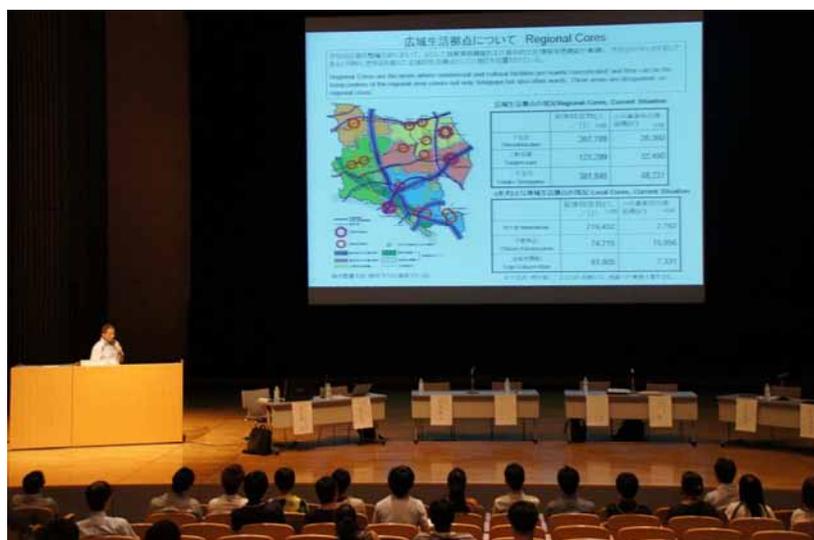
1. 世田谷区の概要、ワークショップの進行の紹介－小林正美
2. アメリカにおける環境デザイン・事例紹介－ピーター・ボッセルマン
3. フランスにおける環境デザイン・事例紹介－アン・シェウ
4. アジアにおける環境デザイン・事例紹介－出口敦
5. ロンドンにおける自転車利用促進事業の紹介－藍谷鋼一郎
6. 世田谷区におけるグリーン政策の紹介－保坂展人
  - ・小田急線上部利用区案の解説など（映像つき）
7. コメント－倉田直道
8. コメント－佐々木宏幸
9. ディスカッション－全員
  - ①代替エネルギー
  - ②コンパクトシティとグリーンネットワーク
  - ③コミュニティ（職住近接）

■内容：



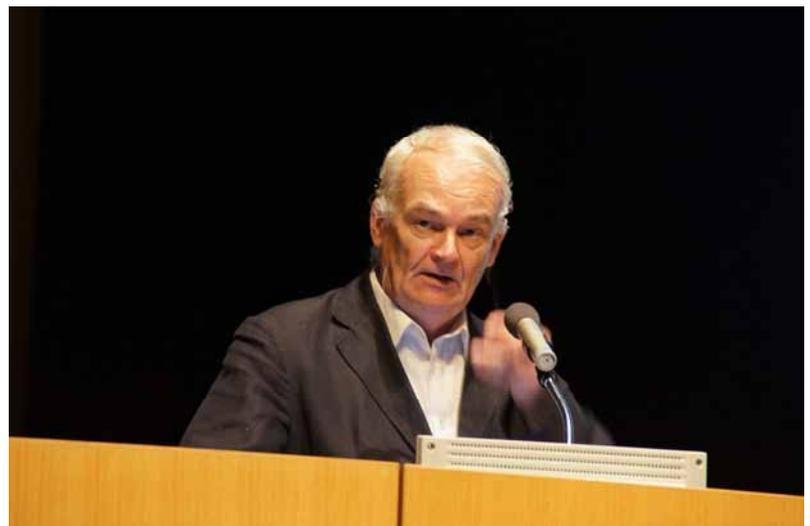
1. 世田谷区の概要、ワークショップの進行の紹介—小林正美

建築学科長による挨拶の後、小林正美氏により、世田谷区の概要および同時進行で進行している「2012 国際建築都市デザインワークショップ下北沢」に関する紹介があった。世田谷区については、GIS（地理情報システム）情報による、①人口構成と居住領域の分布図、②交通不便地域と居住領域分布図の重ね図、③教育施設と居住領域分布図の重ね図、④公共施設と居住領域分布図の重ね図などが提示され、広域生活拠点とそれ以外の領域をどのように再編成していくべきかという課題が示された。また、国際デザインワークショップの中間成果の紹介があり、あらたなコミュニティ単位の必要性が提示された。



## 2. アメリカにおける環境デザイン・事例紹介ーピーター・ボッセルマン

カリフォルニア大学バークレー校のピーター・ボッセルマン教授より、世界中で起きている過去のインフラストラクチャーの再生事例について紹介があった。まず、①アメリカの大学における線状空地の開発に関する類型分析の内容紹介、②バルセロナのランブラス通りの成長過程の紹介、③サンフランシスコの地震による高速道路の廃止後の土地利用の紹介などがあった。都市の嫌悪施設としてのインフラストラクチャーに対する建築の正面が、再生後に反転する具体的な事情が紹介され、具体的に小田急線地下化後の土地利用および周辺開発に関する大きな示唆を得た。



講演するボッセルマン教授

### 3. フランスにおける環境デザイン・事例紹介ーアン・シェウ

引き続き、フランス国立建築大学レン校のアン・シェウ准教授により、パリにおける都市再生の4事例について、紹介があった。①リヨン駅から始まる廃止された高架鉄道の上部を公園にした事例、②パリ西部の周縁部における再開発事例、③パリ南部の周縁部における再開発事例、について具体的な紹介があった。高齢者や自転車利用者など、様々な人たちが使うための環境整備が未熟であるため、そのための方策が必要であるということが提示された。



講演するアン・シェウ准教授



紹介されたパリの事例

#### 4. アジアにおける環境デザイン・事例紹介ー出口敦

東京大学大学院教授 出口敦氏より、韓国における清溪川の再生事業の紹介があり、高架化された高速道路による嫌悪施設として位置付けられていた川が、高速道路の廃止により都市の環境施設としてよみがえり、それまで裏を向いていた建物の正面が反転した事例を示した。また、柏で展開しているようなアーバンデザインセンター（UDC）を開設することにより、市民と行政が話し合いながら街づくりが進められるような施設整備の必要性が提示された。世田谷区では1970年代より、都市デザインセンターが活動していたが、その後廃止されたので、その復活も含めた都市構想の必要性が主張された。



講演する出口敦教授



紹介された清溪川の事例

## 5. ロンドンにおける自転車政策の紹介－藍谷鋼一郎

九州大学の藍谷鋼一郎准教授より、英国ロンドンにおけるレンタル自転車事業の報告があり、低炭素時代に入り、西欧諸国が自動車優先の都市計画から自転車や歩行者優先の都市計画に明らかにシフトしており、まだ我が国の都市政策がそこまで辿りついていないという指摘があった。世田谷区が試みているレンタル自転車システムの「がやりん」の一層の促進が待たれるという指摘があった。



講演する藍谷鋼一郎准教授



紹介されたロンドンのレンタル自転車システムの事例

## 6. 世田谷区におけるグリーン政策の紹介－保坂展人

世田谷区の保坂区長から、まず、2011年3月11日の大震災以来、世田谷区が取り組んでいる防災対策、ソーラーエネルギーの普及政策などについて、紹介があった。その後、下北沢地区を中心とした小田急線地下化後の上部利用計画について、世田谷区が最近発表した素案を具体的に解説した。基本的には緑あふれる公共空間を連鎖的に配置することを考え、共同事業者である小田急電鉄と協議を重ねながら、今までにない都心の環境防災空間の実現を目指していることが示された。



下北沢プロジェクトの世田谷区素案を紹介する保坂世田谷区長

## 7. コメントー倉田直道

工学院大学倉田直道教授から、今回の各講演に対するコメントがあった。出口教授の指摘にあったように、世田谷区や下北沢の計画については、単に計画して、物理的な環境をデザインするだけでなく、その後市民と行政が一緒になって管理運営していくような場づくりが重要である、というような主旨であった。

## 8. コメントー佐々木宏幸

明治大学准教授佐々木宏幸准教授から、講演全体を聞いた感想についてコメントがあった。基本的には、国際的なレベルで低炭素時代の持続可能な都市環境をどう構築していくかという議論をすることが重要であり、明治大学建築学科では、2013年から新たに「国際プロフェッショナルコース」を大学院レベルで開設し、これに資する人材育成と議論の場作りを目指しているという報告があった。

## 9. ディスカッションー全員

決められた時間が殆ど前半の講演で使われてしまったこともあり、あまり深い議論には至らなかったが、欧米諸国の歩行者優先、高齢者や子供などの弱者に配慮したまちづくり、いつ来るか分からない天災に対する準備体制、実現した開かれた公共空間における市民参画の仕組みづくり、などのキーワードが提示され、先進自治体である世田谷区を一つの日本のモデルとして捉え、新しい試みをしていくことの重要性が確認された。



## まとめ

今回の「国際シンポジウム」は、同時期に明治大学建築学科と日本建築学会で共催して開催された「2012 国際建築都市デザインワークショップ下北沢」の関連イベントとして位置付けられた。そのため、観客数は約 70 名であったが、国籍はインド、シンガポール、チリ、ドイツ、スロバキア、中国、韓国、日本などの 9 か国におよび、国際色の強いシンポジウムとなった。予算的な事情があり、同時通訳を整備することができず、逐語訳で進行したため、予想通り最後には時間が足りなくなるという事態が発生した。補助金の使用目的はやはり海外からの講演者の渡航費が優先されるが、今後は同時通訳の費用というものも構造的に補助金制度に組み込む必要があることが今後の課題と言えよう。

内容的には、海外の先進事例に関する知見を専門家が紹介し、それを実現する可能性を探るワークショップ参加者（主に大学院生）が吸収し、その計画を実行する責任者である地方自治体の首長がその議論に加わるというフォーメーションは、立体的に構成されており、単なる議論だけの議論に終わらない可能性を示していた。

初めて参加した外部の聴講者にとっては、多少分かりづらいこともあったと思われるが、内容的には充実したものであったと関係者は評価していた。明治大学理工学部の建築学科は、2013 年から「国際プロフェッショナルコース」を大学院レベルで開設し、英語中心の授業を構成するが、今後このような国際シンポジウムは半ば恒常的に開催していきたいと位置づけている。その意味では、スタッフ不足による運営の未熟さも露呈されたが、今回のシンポジウムの開催は大変意味の深いイベントであったと位置づけたい。今回のシンポジウム開催に尽力された関係者に心より感謝いたします。

2012 年 8 月

明治大学理工学部建築学科長  
小林正美